



新たなcommonsと資源管理システムの生成：
エチオピア西南部農牧民ツァマコの事例から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-04-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮脇, 幸生 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00017640

〈論文〉

新たなコモンズと資源管理システムの生成

—エチオピア西南部農牧民ツアマコの事例から—

宮脇幸生*

1. はじめに

本稿の目的は、エチオピア西南部の農牧民ツアマコ (Tsamako) で近年導入された灌漑農耕において、資源の管理がどのように行われているのかを明らかにすることである。¹

現地住民による森林、灌漑耕作地、放牧地、海洋資源などの資源管理は、従来からコモンズという概念によって研究されてきた。「コモンズの悲劇」という形で最初に共有資源管理の困難を指摘したハーディンは、コモンズの荒廃を防ぐためには、国家権力による統制か、合理的な個人による私有化が必要であるとした (Hardin 1968)。この考えに対しては、さまざまな批判がなされた。とくに文化人類学者や社会学者は、コモンズは実際には、限られた範囲の共同体によって、厳格なルールのもとで持続的に使用されており、ハーディンが想定したような規範を欠く資源管理は、コモンズの管理ではなく、オープン・アクセスの資源形態であると批判した (Freeny et al. 1998)。

だが今日、これらの研究が想定している「閉鎖的で恒久的な共同体」を現実の世界に見出すことは困難になっている。むしろこれらの共同体は、以前でもより大きな社会システム・生態系システムの一部であり、今日では外部との関係によって、共同体のシステム自体がより大きく変化しつつあると考えるべきではないだろうか (cf. Berkes 2002)。またそのようななかで、システム自体の形成・再編成のプロセスにも焦点が当てられる必要があるだろう。

エチオピアは2020年までの10年ほどの間に、年10パーセント前後の高い経済成長を維持してきた。この経済成長を維持するために、エチオピア政府は大規模な資源開発に乗り出している (Lavers 2012)。ツアマコの居住する南部諸民族州は、そのような資源開発の最前線の一つで、州の南西端のオモ川流域では、農牧民の土地がプランテーションとして接収されるという大規模な土地収奪も起きている (佐川 2014; 2019)。ツアマコの居住地域でも1990年から綿花プランテーションが作られ、放牧地

¹ 本報告は、科学研究費基盤B「経済開発と資源の重層的ガバナンスに関する人類学的研究—エチオピアの事例から」の成果の一部である。

が接収されており、一部の地域住民はこれに激しく抵抗した。けれどもそれから30年近くの間、国家・企業・地域住民の間で交渉が行われ、重層的な資源管理システムが形成されつつあるように思われる。この地域では、グローバル・ナショナル・ローカルという異なったレベルの間の関係を、共有資源の管理システムの形成から見ることのできるのである。

本報告ではこれら異なったレベル間の関係性を念頭におきつつ、①ツアマコに作られた灌漑耕作地はどのようなものなのか、②その管理システムはどのようなになっており、どのようにして構築されたのか、③地域集団にどのような変化をもたらしたのかの3点を明らかにする。用いるデータは、現地調査での聞き取りおよび参与観察によるデータ、灌漑耕作地を管理する委員会の記録、そして1984年から2021年までの衛星写真である。² まずこの地域の歴史から見ることにしよう。

2. ツアマコとプランテーションの開設

ツアマコはエチオピア西南部南部諸民族州に住むクシ系農牧民である。人口は21,000人（2018年現在）、12の地域集団に分かれている。西をオモ系農牧民バンナ（Banna）、東をクシ系農牧民コンソ（Konso）、南をクシ系農牧民ホール（Hor）と接している。

ツアマコは、ウシ・ヤギ・ヒツジの牧畜と農耕による自給自足的な生活をしてきた。ツアマコの居住地域の東端には、北の山地に発するウォイト（Woito）川という全長約170キロの河川が、北から南へと流れている。1990年にツアマコの居住域の北東部に、ウォイト川から水を引く灌漑による綿花プランテーションが建設された（図1）。このプランテーションは、当時のEPRDF政権によって模範的な資源開発の例として称賛された。プランテーションの近くにはウォイトという町が作られ、200キロ北東の農耕地域から、農牧民ウォライタ（Wolaita）が季節労働者として移住し、綿摘みの作業をするようになった。プランテーションは拡大し、1995年には不満を抱くこの地域のツアマコがプランテーションを襲撃したが、ただちに地方政府から軍隊が派遣され、鎮圧された（宮脇2011）。プランテーションは2002年に国際的な綿花価格の下落を受けて破産し、操業を停止してしましたが、その後経営者が変わって再興され、現在も経営されている。

² 現地調査は2018年8月11日～17日、2019年8月18日～23日に行った。衛星写真はLandsat4（1984～2001）、Landsat7（2003～2017）およびGoogle Earth（2016、2018）を用いた。

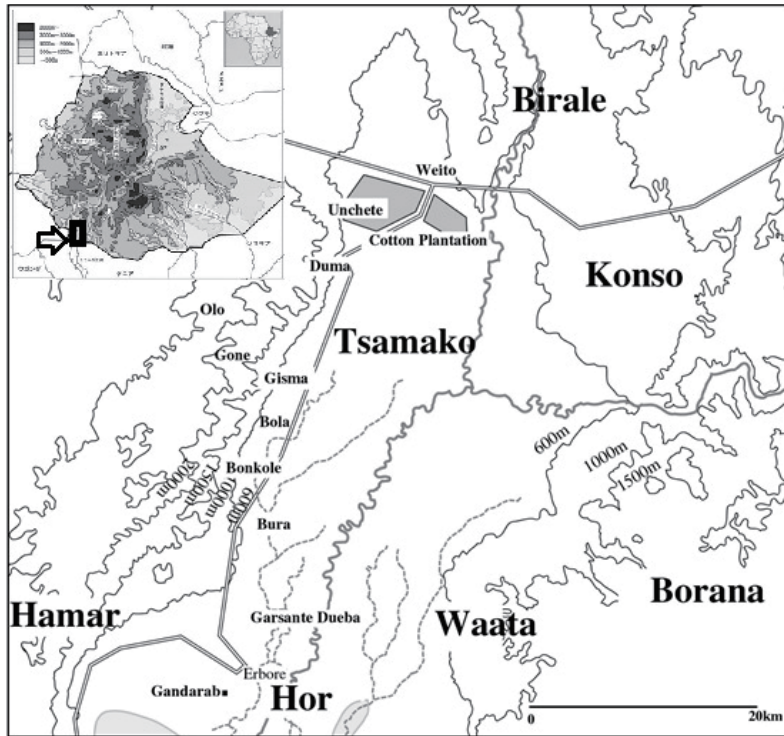


図1 エチオピア西南部ウイト川周辺



図2 かつてのツアマコと現在のプランテーション・畑・町

プランテーション形成前後のようすを、図2の写真を時計回りに見て行くことで説明しよう。左上は筆者が1987年に、はじめてツアマコを訪れたとき滞在させてもらった家族の写真である。まだプランテーションはできておらず、人々は農耕と牧畜で暮らしていた。右上の写真は、プランテーションでの綿摘みの作業である。労働者の多くは、200キロ離れた地域から来るウォライタの人びとだ。その下は、プランテーションの隣に作られたツアマコのトウモロコシ畑である。このとき（2004年）にツアマコたちは、経営破綻し事業を停止していたプランテーションの用水路の水を利用して畑を作っていた。左下は、ウオイトの町で、もとはプランテーションの季節労働者の宿泊所だったが、1995年に最小の行政単位である行政区（kebele）とされた。ツアマコの居住地域では唯一、商店のある町である。アムハラ（Amhara）、ウォライタ、ツアマコ、ホールなど、多様な民族が住んでいる。新興のキリスト教会もいくつかある。現在でもツアマコの多くは、農耕と牧畜による自給自足的経済に生きているが、プランテーション周辺の町では、賃労働に携わる者も出てきている（宮脇2012）。

次にプランテーションで周辺のツアマコの暮らしがどのように変わったのかを、農耕に焦点を絞り見てみよう。

3. プランテーションの開設とツアマコの暮らしの変化

もっとも大きく変わったのは、農耕の方法である。³プランテーションができる以前は、ツアマコの農耕は、天水による畑（balale）と、川の氾濫を利用した畑（buulo）で行われていた。また北東部には数年に一度くらいの割合で冠水する湿地があった。それぞれの世帯はウシや小家畜をもっていたが、家畜は早魃や疫病で頭数が変化する。天水畑のための土地は十分にあり、オープン・アクセスの資源である。氾濫原の畑は地域集団の長老によって、世帯間に公平に分配される。このような条件下で、世帯間の経済格差をもたらす要因はなかった。

プランテーションができて、この地域のツアマコの農耕が灌漑農耕にシフトすると、状況は大きく変化した。用水路によって灌漑される耕作地（pasho andet）も、また水自体も、希少な資源である。それを分配するための新たな社会制度が作られたのだった。

ここで、それぞれの耕作地の生態資源としての価値を整理しておくことにしよう（図3）。

³ ここでは農耕の方法についてのみ取り上げるが、そのほかの生活の変化については、（宮脇2012）を参照。

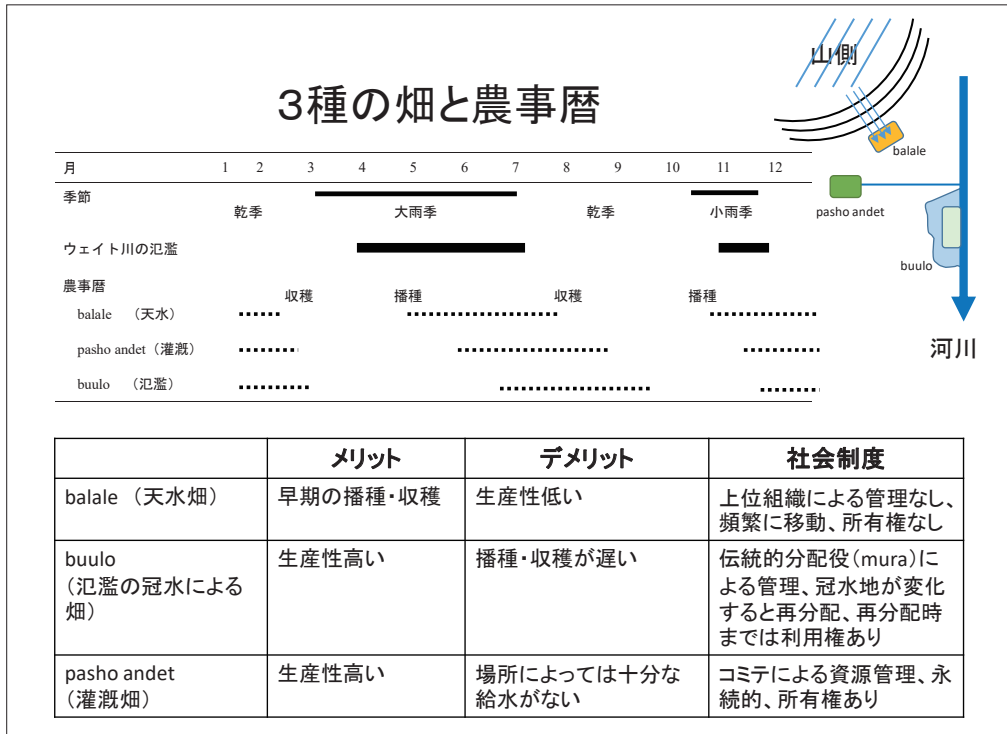


図3 天水畑・氾濫原畑・灌漑畑

天水による畑、氾濫原の畑、灌漑畑には、それぞれメリット、デメリットがある。天水による畑は、穀物を早く播種でき、早く収穫できるというメリットがある。また土地も十分にある。しかし水分が少なく、生産性が低いというデメリットがある。氾濫原の畑は、水分が多く生産性が高い一方で、播種と収穫が遅いというデメリットがある。また土地も限られている。灌漑による畑は、生産性が高く、また川の増水はツアマコの居住地のような低地の不安定な降雨よりも安定した高地の降雨によるので、天水よりも給水が確実である。しかし土地が限られており、またウオイト川の水の少ない小雨季には、用水路の下流では十分な灌漑用水が行き渡らないこともある(図3)。

このように見ると、灌漑による耕作は、天水耕作や氾濫原耕作に比べて、安定性や生産性、播種・収穫時期の制御可能性で優れていると言える。けれどもそれに必要な土地も水も、希少な資源である。

希少な資源(コモンズ)を分配するためには、適切な社会制度が必要になるはずだ。氾濫原の畑は、伝統的な長老集団による分配がなされていた。だが灌漑畑に関しては、全く新たな制度が作られた。本報告が焦点を当てるのは、この新たなコモンズである灌漑畑の分配制度についてである。ここではまず、土地ではなく、水資源の分配を支える制度について見てみよう。

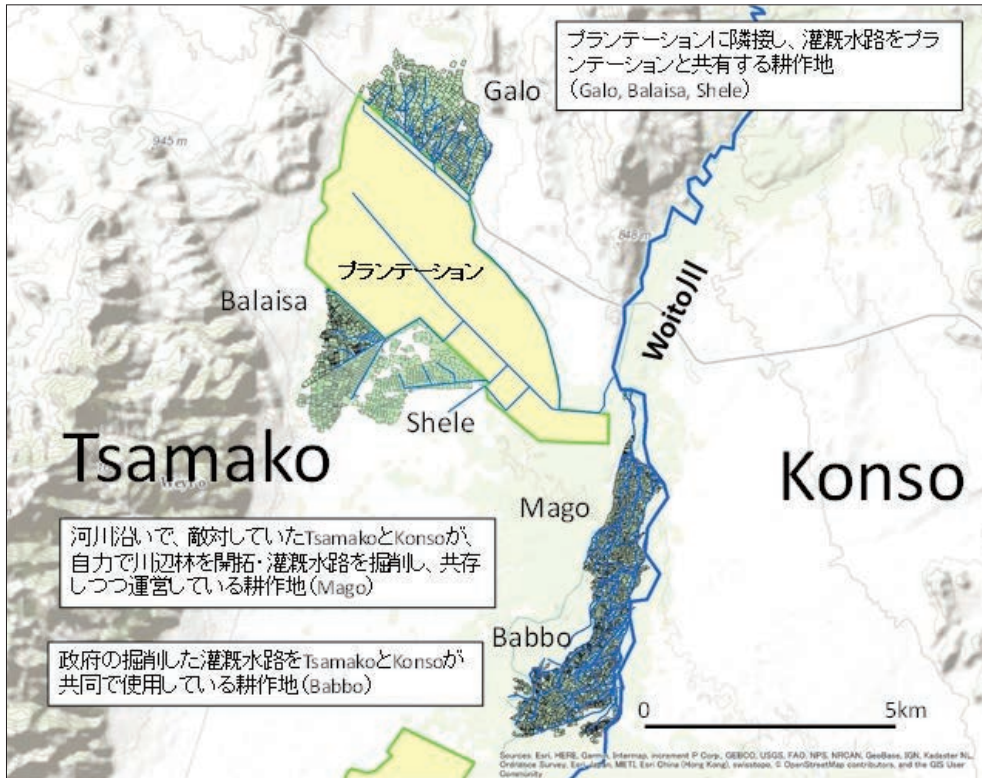


図4 灌漑畑の配置

図4はプランテーションとウオイト川周辺の灌漑畑の配置を示している。北から順にみてみよう。まず、Galoという耕作地がある。ここはプランテーションの用水路から水を引いている。プランテーションの南には、BalaisaとSheleという耕作地がある。これらもプランテーションの用水路を利用して、灌漑をしている。それに対してウオイト川沿いのMagoとBabboという耕作地は、直接ウオイト川から水を引いている。ウオイト川の周辺は、うっそうとした川辺林が茂っていた。MagoとBabboは、この川辺林を伐採して開かれた。

ここで5つの耕作地について整理をしておこう(表1)。ポイントとなるのは、水源、耕作者の民族集団、管理システムである。プランテーションに隣接するGalo、Shele、Balaisaは、どれも水をプランテーションの用水路から得ている。耕作者はどれも、もともとこの地域に住んでいたツアマコの地域集団の住民である。水を分配する組織は、後に述べるように、地域住民の組織が地方政府と連携して運営している。これと対照的なのが、川辺林に開かれたMagoという耕作地である。ここにはザンババ(Zanbaba)という用水路が掘られており、水源はウオイト川である。Magoでは1990年代まで川をはさんで敵対していたツアマコとコンソという二つの民族が、共同して

表 1 各耕作地の諸属性

灌漑耕作地名	水源	面積 (ha)*	筆数*	用水路建設者	耕作者の所属民族・集団	開墾開始時期	管理者
Galo	プランテーションの用水路	960	925	Tsamako (Unchete)	Tsamako (Unchete 地域集団)	2009 年頃	耕作者管理組織 + 地方政府
Shele	プランテーションの用水路	326	461	プランテーション	Tsamako (Unchete 地域集団)	1998 年	耕作者管理組織 + 地方政府
Balaisa	プランテーションの用水路	887	970	プランテーション	Tsamako (Duma 地域集団)	1998 年	耕作者管理組織 + 地方政府
Mago	Woito 川	1,542	3,242	Konso+ Tsamako	Konso + Tsamako (Unchete 地域集団)	2004 年頃	耕作者の自主管理組織
Babbo	Woito 川			州政府	Konso + Tsamako (多様な地域集団)	2007 年頃	耕作者の自主管理組織?

* Google Earth の衛星写真から ArcGIS10.8.1 により計測

水資源の管理にあたる組織を構成している。その南の Babbo も Mago に似ており、用水路によってコンソが耕作をしていたのだが、5 年前から州政府が新たな灌漑用水路を建設し始め、ツアマコも耕作を開始した。その水路を管理するために政府の任命した地元のツアマコの行政官が、管理にあっている。⁴

⁴ ここでもう少し詳しく、それぞれの耕作地の面積の最頻値、平均値、標準偏差について見ておこう。

	耕作地名	面積	筆数	平均面積	最頻値面積	標準偏差
灌漑畑	Galo	960	931	1.03	0.5	0.79
	Shele	326	461	0.71	0.5	0.44
	Balaisa	981	886	1.11	0.5	0.80
	Mago	1542	3242	0.48	0.4	0.26
天水畑	Duma	433	313	1.38	0.6	1.10

面積の単位はいずれも ha

プランテーションに隣接する天水畑の Galo、Shele、Balaisa の平均面積は、0.7～1.1 ヘクタールだが、最頻値はいずれも 0.5 ヘクタールである。このことは灌漑畑の分配方法と関連している。これらの畑のうち、最初に分配されたのはプランテーションの南西側にある Shele と Balaisa の畑だった。これらの畑は、プランテーションの設立にともない放牧地を失った Unchete と Duma の住民への補償として、プランテーションによって 1995 年に分配された。そのときの面積が 0.5ha だった (Melesse 1997)。Galo では 2002 年に耕作地が行政区の役員

4. 灌漑畑の管理システム (1) ープランテーションに隣接する政府と共同管理の灌漑畑

さて本稿では、これらの耕作地のうち、プランテーションに隣接する耕作地 Galo の管理システムについて見ていきたい。この耕作地は、プランテーションが 2002 年経営破綻したときに、この地域のツアマコが用水路沿いに耕作を開始したのが始まりだった。2006 年に新たな経営者がプランテーションの経営を引き継ぎ、プランテーション周辺からツアマコたちを追い出したが、彼らは排水溝の水を利用して、自動車道をへだてプランテーションと反対側になる北側の Galo に耕作地を作った。その後 2009 年に、地方政府の仲介で、川沿いの土地をプランテーションに与える代償に、プランテーションの北側の土地 (Galo) を、用水路の水を利用して開拓するという取り決めをしたのだった。現在、プランテーションの用水路から分岐した 6 つの用水路がある (図 5)。

水はプランテーションの水路から引いているので、プランテーションとの調整が必要である。さらに 1 つの水路から 6 本の用水路に水を引くので、これら 6 本の用水路間でも調整が必要となる。また 6 本それぞれの水路から、各々 100 前後の耕作地に給水されるので、そこでも調整が必要となる。さらに水路は雨季 (年 2 回) ごとに補修が必要になる。これらの問題は、どのように解決されているのだろうか。

共有資源を持続的に利用するためには、それを利用するメンバーが過剰利用を避けるために一定の規範に従う必要がある。そのためには、資源を利用するメンバーが限定されている必要があるだろう。またそれぞれのメンバーの資源利用の状況がモニターされ、規範から逸脱するメンバーが出た場合は、何らかの制裁を加え、規範の侵犯を抑止する必要がある。また資源利用状況のモニタリングや制裁を加えるのにかかるコストが大きすぎるとは、持続性に問題が生ずるだろう。さらに規範自体がそのとき

によって分配されたが、管理組織の立ち上げに際しては、Shele と Balaisa のやり方を踏襲したという。分配面積もそれに倣ったのではないかと思われる。

なおそれぞれの分配の後、用水路を利用するツアマコたちによって、Galo と Balaisa は外部に広がっていき、周辺部に面積の広い畑が作られていった。他方で Shele は分配当時すでに山裾まで広がっていたために、新たな畑はほとんど作られていない。そのことが、Galo と Balaisa には広い畑があり、畑の面積のばらつき (標準偏差) が大きい一方で、Shele では畑の面積の変異幅が小さく、平均面積が狭い理由となっている。

ウォイト川西岸の Mago (および Babbo) は畑の平均面積が狭く、広さのばらつき具合が小さいことが特徴だが、まだ調査が進展していないために、その理由については不明である。

Duma の天水畑は、灌漑畑と反対に、面積が大きいうえに、広さのばらつき具合も大きい。天水畑のための土地は、すでに述べたように、オープン・アクセスの資源であり、ツアマコはそのときどきの事情に応じてさまざまな広さの畑を作ることができる。それが広さに大きなばらつきのできる要因であると思われる。また天水畑は灌漑畑に比べて生産性が低い。それが 1 筆の面積が大きな理由であると考えられる。

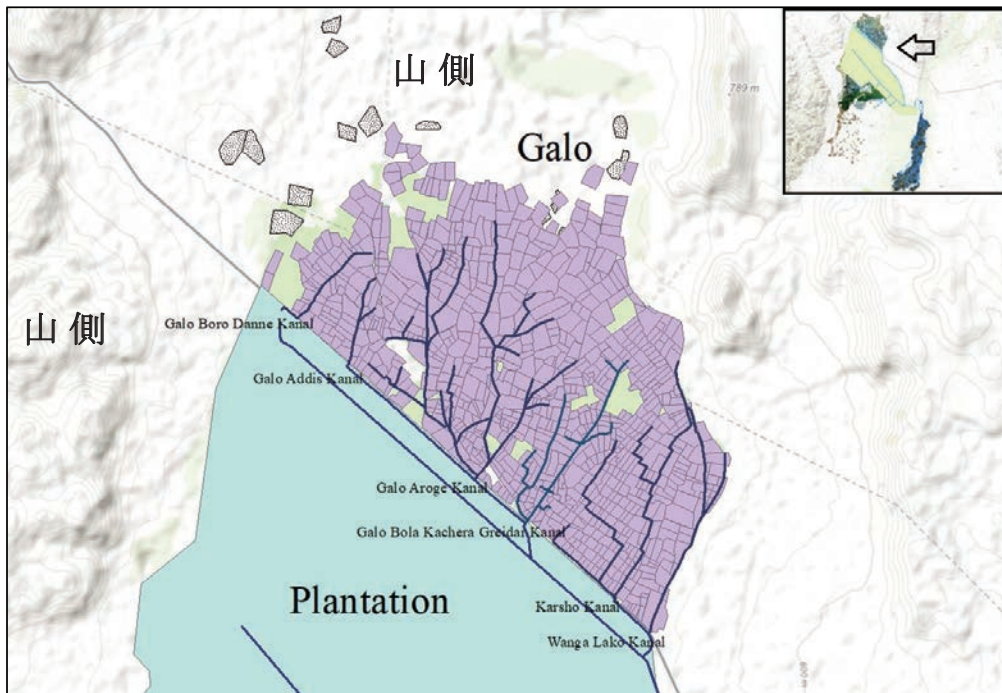


図5 Galoの灌漑畑

どきの状況に適合したものであり、メンバーが妥当であるとみなしたものでなければ、規範を遵守することを強いるのも困難になるはずだ (Ostrom 1990)。ここでとりあえず、整理のために、エリノア・オストロムが提示した共有資源の管理制度が適切に機能する条件を、あげておこう (表2)。

表2 共有資源の管理制度が適切に機能する条件

1. 明確に定義された境界 (Clear boundaries & memberships)
2. 地域の事情に適合したルール (Congruent rules)
3. 利用者たちはルールの改変にかかわることができる (Collective-choice arenas)
4. 共有資源の管理状況を監査する者は、利用者に状況を説明している (Monitoring)
5. 徐々に強められる制裁処置 (Graduated sanctions)
6. 利用者間の対立を解消できる場がある (Conflict-resolution mechanisms)
7. 利用者が政府の介入を受けずに制度を改変することができる (Recognized rights to organize)
8. 資源の利用、設備の維持、監査、制裁処置の適用、対立の解決は、複数の層からなる入れ子構造に組み込まれている (Nested units)

Ostrom 1990 より

ツアマコの水資源の管理をこれらの条件に照らし合わせると、何が言えるだろうか。ここで Galo の耕作地の管理制度はどのようになっているのかを、オストロムのあげた条件に照らし合わせてみよう（図 6）。

6本の用水路によって灌漑される耕作地は、それぞれ対応した集落の世帯が耕作しており、オープン・アクセスの資源ではない。それぞれの用水路を利用する世帯数は100前後であり、互いによく知っているために、ルール違反もすぐに知れ渡る。「1. 明確に境界の定められた資源とメンバーシップ」という条件は満たしている。

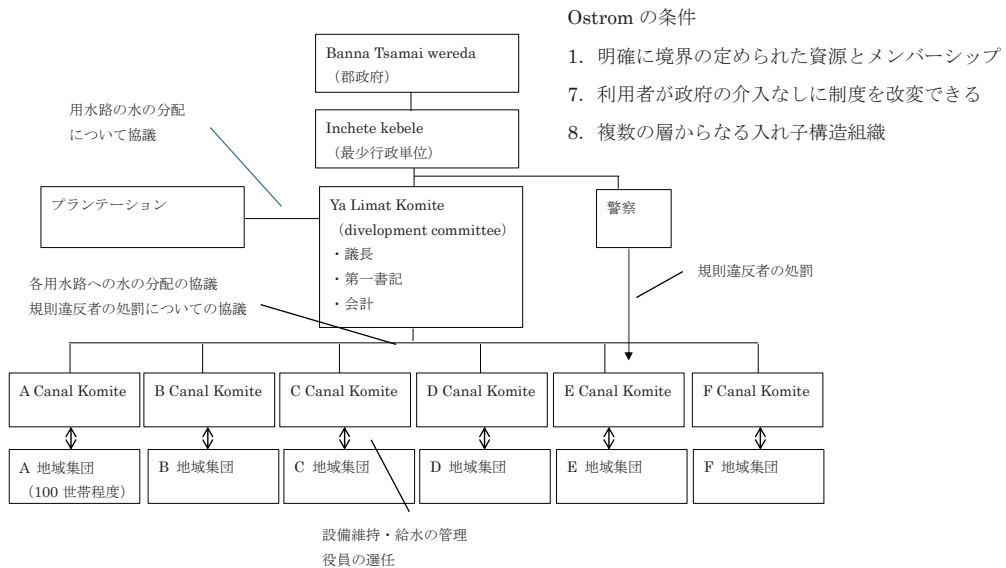


図 6 Galo の共有資源管理制度

それぞれの用水路には「用水路管理委員会 (kanal komite)」が作られており、合議によって組合の議長、書記、会計が選ばれ、水の分配や用水路の補修、ルール違反者の処罰、罰金等の管理にあっている。⁵ これらの委員会の上には、それらを統括する「開発委員会 (ye limat komite)」が置かれる。「開発委員会」の役員は、A～Fの委員会の世帯を集めた集会で、合議で選ばれる。この委員会は、罰金の制定の他、A～Fの用水路への給水の順番を決める。またプランテーションと交渉し、プランテーションとツアマコの耕作地への水の配分も調整する。さらに、各地域の用水路管理委員会で、ルール違反者が出た場合には、地域の行政区と協同し、警察を動員して違反者を処罰させることもできる。つまり、Galo の管理制度は、入れ子構造になっており（「8.

⁵ 図 6 の A～F の委員会は Unchete 内の地域集団からなり、実際にはそれぞれ名前があり、図 5 の地図上の 6 本の用水路のうち 1 本を管理している。

複数の層からなる入れ子構造)、政府機関とのつながりを持つ一方で、その内部は自立しており、運営のシステムを自ら決めている(「7. 利用者が政府の介入なしに制度を改変できる」)。

次に、共有資源を管理するためのルールがどのようになっているのかを見てみよう(表3)。各用水路管理委員会の委員、さらに統括する開発委員会の委員は、地域集団のメンバーによって選ばれる。設備維持や給水のルールは、各委員会の委員が集まり決められる(「2. 地域の事情に適合したルール」「3. 利用者はルールの改変に関与可能」)。またルールを破ったメンバーに対しては、罰金の支払いの命令、それに応じなければ給水停止、さらには警察による拘束と、段階的に制裁措置が強められる(「5. 徐々に強められる制裁処置」)。また、耕作者間で対立が生じたり、制裁に対してメンバーが異議を申し立てる場合は、委員会の場でそれぞれが自分の立場を主張できる(「6. 利用者間で対立を解消できる場」)。このように、Galoの資源管理制度は、オストロムの提示する持続性の条件を満たしているように思われる。

表3 Galoの共有資源管理のルール

<p>各コミテの役員の選任ルール</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域集団のメンバーによる合議(直接民主制)で決定 ・報酬はない <p>設備維持のルール</p> <ul style="list-style-type: none"> ・用水路は、1年に2回整備する ・メンバーは1回の整備に2週間(3h/day)の労働を供出 ・1日休むと50ブルの罰金 ・支払わない場合は、給水停止、警察による拘束 ・罰金は各コミテで蓄えておく <p>給水のルール</p> <ul style="list-style-type: none"> ・十分に水がないとき(小雨季)は、内部の用水路の整備ができている順に給水を行う ・違反者(水盗人)は、各コミテが上位のコミテと相談し処罰、1回目の盗水は50ブル、2回目は100ブルの罰金 	<p>Ostromの条件</p> <ol style="list-style-type: none"> 2. 地域の事情に適合したルール 3. 利用者はルールの改変に関与可 5. 徐々に強められる制裁処置 6. 利用者間の対立を解消できる場
---	--

5. 灌漑畑の管理システム(2)ーウォイト川西岸の自主管理の灌漑畑

ここでウォイト川西岸の耕作地についても触れておこう。ここではツアマコと、かつて敵対していたコンソが共同で灌漑耕作をしている。またGaloに見られるような

政府との連携もなく、まったく自主的な管理がなされている。筆者の興味を中心もこの耕作地にあるのだが、新型肺炎流行のためにフィールドワークを中止せざるを得ず、残念ながら断片的な情報を少し提示できるだけにとどまる。まず全体的な見取り図から示しておこう。

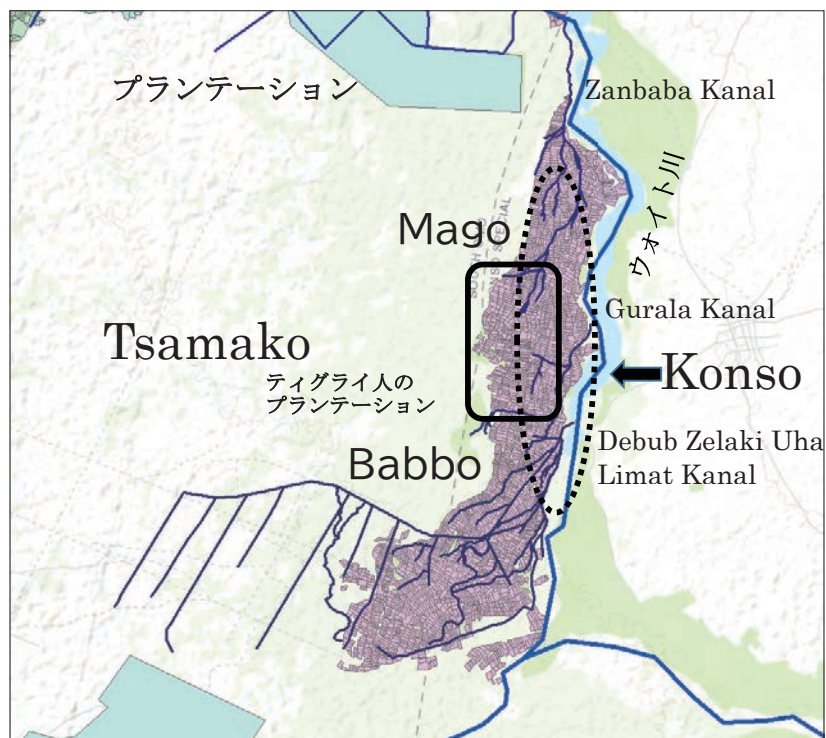


図7 ウォイト川西岸の灌漑畑

図7の北側の Zanbaba Kanal (ヤシの木用水路) という用水路によって灌漑されるのが、Mago と呼ばれる耕作地、南側の Debub Zelaki Uha Limat Kanal (南部恒久的水源開発用水路) という用水路によって灌漑されるのが、Babbo と呼ばれる耕作地である。どちらもツアマコとコンソの両民族が耕作しているが、コンソの耕作地は、Zanbaba Kanal の下流、Debub Zelaki Uha Limat Kanal の上流部に集中している (図7の点線で囲ってある地域)。またそのあたりは、ティグライ (Tegrai) の企業家のプランテーションがあるが、2019年時点では実際には耕作機械が置かれているだけで運営されていなかった。コンソの農民は地方政府から何度も立退きを要求されているにもかかわらず、ここでも耕作をしている。

Mago も Babbo もツアマコとコンソの耕作者が共同で管理組織を運営しており、給水・耕作のルールが定められている。



図8 川辺林と伐採・Magoの用水路・ウオイト川の取水口

河岸の耕作地の様子を、図8から時計回りに見てみよう。左上の写真は、このあたりの川辺林である。右上は、2004年の写真で、ツアマコがここから川辺林を伐採し始めていることがわかる。右下はMagoの耕作地である。ここでは年に2回トウモロコシが栽培される。播種の前には、2回牛耕を行う。またバナナも栽培されている。プランテーションに隣接する耕作地とは違い、ところどころに樹木が残されていることがわかる。写真の真ん中を走っているのは、用水路である。左下の写真は、ウオイト川と対岸のコンソの領域を示している。収穫されたトウモロコシを積んだロバが渡渉している。コンソはここで取れた収穫物を、コンソの市場で売却する。なお、対岸のコンソの領域にも、灌漑耕作地がある。⁶

⁶ ここで興味深いのは、ウオイト川西岸の耕作地は、物理的環境としての耕作地の持続性自体が、プランテーションの設立と密接にかかわっているように思われることである。プランテーションが拡大する以前は、この辺りのウオイト川の流路は数年に1度は変化しており、用水路を用いた耕作をすることは不可能だった。Landsatの衛星画像を確認すると、1990年代半ばまで、ウオイト川は現在の耕作地が開かれている西端を流れている。2000年代になり、北側のMagoで流路が東に大きく変わり、それ以降Magoではほとんど流路は変化していない。他方で南側のBabboでは、2010年に流路が東に移動し、現在の流路とほぼ同様になっている。2010年以降は、ウオイト川の流路は変化していない。

2000年から2010年にかけては、プランテーションだけでなく、Shele、Balaisa、Galoと

次に、私の聞き取ることができた Babbo で耕作しているツアマコの耕作者の資源管理について、簡単に触れておこう。

Babbo と呼ばれる耕作地をもともと開墾したのは、対岸から来たコンソの農民だった。彼らは用水路を掘り、ウォイトから水を引いて灌漑耕作を始めた。2015年に州政府のプロジェクトで、新たにコンクリートの用水路が作られ、取水口から上流部にかけはそのままコンソの農民が耕作し、下流部の耕作地がツアマコに分配された。ツアマコはコンソの農民から、用水路の管理方法や作物の耕作方法を学んだと言われる。

表 4 Babbo の耕作地のルール

<p>各コミテの役員の選任ルールと役割</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各委員会には、委員長、書記、会計が1人ずつ ・水の分配と、水泥棒の取り締まり、用水路の補修工事の統括 ・委員会間の交渉 <p>設備維持のルール</p> <ul style="list-style-type: none"> ・設備維持（年に2回） ・用水路の修理に6日 ・用水路の浚渫に3～4日 <p>給水のルール</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の用水路の補修を早くした者には、早く給水される ・小雨季には、下流の委員会は上流の委員会と交渉し、給水 ・違反者（水泥棒）は、1500ブルの罰金
--

いうプランテーションに隣接する灌漑畑も拡大されていった時期である。ウォイト川西岸の耕作地のすぐ上流の取水口のすぐ下流にはダムが作られており、雨季に川が増水した際に、多量の水がプランテーションに流れ込むようになっていた。このような仕組みのために、河川が増水によって一度に多量の水が流れることがなくなったため、西岸の川の流路の変化が起きにくくなり、持続的に利用が可能な耕作地が出現したのではないと思われる。

筆者がこの地域を訪れた2004年には、すでに Mago では川辺林の伐採が始まっていた。また Zanbaba 用水路もこのときにコンソによって掘削されたという。2000年には Mago ではすでに流路は東に寄っており、この辺りを灌漑耕作地とする可能性が見込みのあるものとみなされていたのではないと思われる。Landsat の衛星写真によれば、2007年には Mago の川辺林の伐採は、ほぼ完了しているように見える。

2010年には Babbo の流路も東に移動している。Landsat の衛星写真では、2011年には Babbo において川辺林の伐採はほぼ終わっていることがわかる。このことから当時 Babbo ではコンソが耕作を開始していたものと思われる。政府の用水路である Debub Zelaki Uha Limat Kanal が建設されたのは2015年頃であり、このときにはすでに、Babbo もウォイト川の氾濫と流路の変更で浸食される恐れはないと思われていたのだろう。ウォイト川の用水路沿いの灌漑畑でのツアマコの委員会が設立されたのも、このころと思われる。

ここで耕作しているツアマコは、地元の地域集団ではなく、西の山岳地帯のより土地の痩せた地域から来た人々である。ツアマコの耕作地では、メインとなる政府建設の用水路からいくつかの支流が分岐し、その周囲に 15 の耕作者集団が形成されている（世帯数 31 ～ 104）。この集団は出身地域ごとに分かれており、それぞれ議長や書記などからなる委員会を持っている。政府から任命された「農業委員」の青年が、全体の調整役にあたっており、全委員会を通じて表 4 のようなルールが定められている。この地域は町から遠いため、警察の力を借りることができず、そのためにルール違反の罰金はプランテーションに隣接する耕作地よりも、ずっと高く設定されているとのことである。政府の建設した用水路である *Debub Zelaki Uha Limat Kanal* は、コンクリートで土砂がたまりやすいうえに狭く、下流の委員会からはしばしば水が来ないというクレームがあり、紛争が絶えないとのことである。

表 5 Galo と Babbo の管理システムの持続性評価

Ostrom の条件	Galo	Babbo
1. 明確に定義された境界	✓	✓?
2. 地域の事情に適合したルール	✓	✓
3. 利用者たちはルールの改変にかかわる	✓	?
4. 共有資源の管理状況を監査する者は、利用者に状況を説明	✓?	?
5. 徐々に強められる制裁処置	✓	?
6. 利用者間の対立を解消できる場	✓	✓
7. 利用者が政府の介入を受けずに制度を改変できる	✓?	?
8. 複数の層からなる入れ子構造組織	✓	?

オストロムの提示した、共有資源の管理制度が持続可能である条件を、先に紹介したツアマコのそれぞれの農耕管理組織がどれほど満たしているのかを示したのが、表 5 である。プランテーションに隣接する Galo は、これらの条件をほぼ満たしているように思われる。川沿いの Babbo については、コンソの農民へのインタビューができなかったため、はっきりしたことは今の時点で言うことはできない。

水資源の管理制度という観点から見た場合、少なくとも Galo の管理制度は持続性があるように思われる。だが、そもそもこれらの耕作地がどのように分配され、この制度がより大きな社会システムにどのように位置づけられているのかを見ると、ツアマコ社会に大きな変化と分断がもたらされたことがわかる。

6. 平等社会から格差社会へ ー共有資源管理システムと外部システムの関係性

表6は、Unchte 行政区の Karsho 集落に住む 136 世帯が所有している灌漑畑の筆数を、畑を給水している灌漑用水路別に見たものである。最も多いのが、この地域の住民があてがわれている Karsho Kanal によって灌漑される畑だが、他の用水路によって灌漑される畑をもつ世帯もあることが分かる。これだけを見ると、灌漑畑の筆数は 226 筆であり、136 世帯それぞれに分配されるのに十分であるように思われる。

表 6 Karsho 集落の世帯の所有灌漑畑筆数

用水路の場所	用水路名	筆数
Galo	Karsho	115
	Galo Aroge	5
	Wanga Raka	28
	Bola Kachera	25
ウォイト川西岸	Mago	53
	合計	226

だが灌漑畑の所有筆数を、年長世代・年少世代・ハンディキャップをもつ人の3つのカテゴリー別に示した図を見ると、まったく別の状況が見える（図9）⁷。

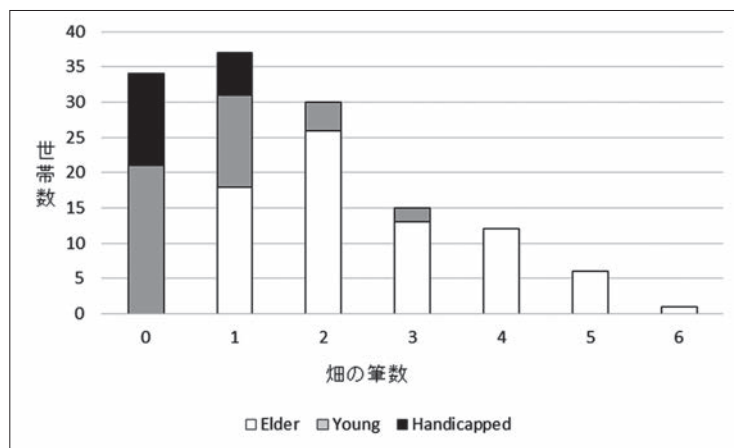


図9 Karsho 在住者 136 世帯への Galo 耕作地の土地分配

⁷ このデータは、B canal の委員会の記録にもとづいている。Elder と Young の区別は、ツァマコの世代組にもとづいているが、だいたい Elder は 40 代以上、Young は 30 代以下くらいである。Handicapped とは、世帯主が身体に何らかの障害を持ち、世帯主一人での耕作が困難な世帯を指す。

この図から明らかなことは、第一に、耕作地の所有状況に大きな格差があるということである。第二に、耕作地を所有していない世帯は若年世帯とハンディキャップを負った世帯主の世帯であるのに対して、多くの耕作地を所有している世帯は、年長世代の世帯である。ちなみに年少世代のうち耕作地を持つ年長世代と親子関係にあるのは40世帯中8世帯(20%)のみである。

これらの耕作地が、エチオピアの法律とは別に、この地域では貸与や譲渡・相続が可能な「私有財産」とみなされていることを考えると、灌漑耕作への移行がこの地域のツァマコ社会に大きな影響を及ぼしたことが明らかである。

プランテーションの設立以前のツァマコでは、天水耕作地の土地は潤沢でオープン・アクセス、冠水地の耕作地は長老による公平な分配がなされていた。家畜は世帯の所有物だが、干ばつや疾病によって増減するもので、経済格差を徴づけるものではなかった。しかし灌漑畑は、天水畑や氾濫原の畑と異なり私有できるうえに、家畜よりずっと安定した資産である。

それではなぜ、特定の世帯は多くの耕作地を手に入れたのだろうか。耕作地の譲渡は、プランテーションと地域のツァマコの対立に、地方政府が介入することでなされた(ちなみに管理制度も、地方政府がパッケージとしてツァマコの耕作者に提示したものである)。このとき譲渡を取り仕切ったのは、地域の長老ではなく、行政の末端組織の役員をしていたツァマコだった。そのときたまたまこの場所を耕作していた世帯に優先的に土地が与えられただけでなく、多くのウシを持っていた世帯は、それを賄賂とすることで、複数の耕作地を手に入れることができたという。長老の分配していた冠水地も灌漑耕作地になり、伝統組織による耕作地の分配は消滅してしまった。

けれどもこのような不公正な耕作地の分配は、Galo だけにとどまらない。ウオイト川西岸の北側の耕作地である Mago をみてみよう。この場所で耕作しているツァマコの農民は、Galo と同様に、行政の末端にいる役員に賄賂を払って土地を入手したと述べている。また耕作地1筆につき、35ブルの税金を納入することが決まりになっているのだが、Mago の畑を分配した行政区の役人はそれを郡(woreda)には連絡しなかった。そのために賄賂を払って Mago の土地を手にしたツァマコは、納税することなく耕作地を利用している。さらにその土地を、1年4,000ブルで、町に住むウォライタの商人に貸与する者もいる。このように、ツァマコでは、以前は増減する不安定な財であった家畜が、土地に変換され、さらにそれが貨幣に変換され、住民間に経済的な格差をもたらしているのである。

ウオイト川西岸で駆け引きを行っているのは、ツァマコだけではない。中央政府の支援を受けるティグライの企業家は、プランテーションを経営するという名目で土地を手にした。けれども実際は何も栽培をせず、かわりにプランテーション経営をするという条件で許可される耕作機械の輸入販売で利益を得ているとうわさされている。

コンソの農民は商業作物栽培のために、この地域で耕作地を拡大している。ティグ

ライのプランテーション内でも耕作をしており、地方政府がたびたび立退き命令を出しているが、頑として聞き入れない。逆に地方政府に納税したり、ウォイト川の流路の変遷を理由にしたりして、この場所での耕作を正当化しようとしていると言われている。

7. 結論

本稿では、エチオピア西南部のツアマコの居住地において、プランテーションの設立にかかわり、1990年代半ば以降から周辺に作られてきた灌漑用水路による耕作地について、それがどのようなものなのか、その管理システムはいかに運営されているのか、そしてそれが地域集団にどのような変化をもたらしたのかを検討してきた。

灌漑耕作地はプランテーションに隣接し、その用水路を利用したものと、ウォイト川西岸に作られ、そこから用水路を用いて給水されるものに大分された。

プランテーションに隣接した耕作地は、プランテーションの拡大にともない、周辺に住むツアマコに放牧地を接収したことの補償として与えられたものと、政府の介入によってツアマコの耕作者とプランテーションの間を調停する形で、ツアマコの耕作者たちにプランテーションからの水の給水と土地の耕作を認可されたものがあつた。

ウォイト川西岸の耕作地は、ツアマコとウォイト川の対岸に住むコンソが共同で用水路を掘削し、その周辺に開いたものだった。ウォイト川西岸は、2000年代まで雨季の河川の氾濫による流路の頻繁な変化によって、恒常的な耕作地には向かない土地だったが、プランテーションの開設とその取水によって、2000年代以降に恒常的な耕作地となった土地であった。

プランテーションに隣接する耕作地のうち、北の **Galo** では、その管理は地元の住民から成る委員会によってなされていた。委員会は2段構造となっており、地元の住民の意見を反映する一方で、プランテーションや警察、行政区とも連携できるようになっている。各委員会は100世帯程度の構成員から成り、設備の補修を怠ったり水を不法に給水した場合の罰則も設けられていた。ウォイト川西岸の耕作地は、ツアマコとコンソが共通の用水路を用いている。南部の **Babbo** では、コンソは用水路の上流、ツアマコは用水路の下流と耕作地が分かれており、別々の委員会を構成している。ツアマコの場合、委員会が管轄する耕作地の入植世帯は100世帯程度であり、耕作地の給水や補修は、それぞれの委員会が管轄している。ツアマコの場合は、それらの委員会を政府から派遣された一人の農業委員がとりまとめている。

それまで主として天水農耕によっていたツアマコにとっては、これら用水路による耕作地は、従来の天水畑や氾濫原の畑とは異なり、恒常的で安定した耕作ができる上に、収穫物の収量も高い、貴重な資源となった。耕作地の管理自体は、少なくともプランテーションに隣接する耕作地を見るならば、持続可能な形で運営されているよう

に思われる。だが土地の分配自体は、地域の住民に公平に分配されたものではなかった。行政区の役員が分配にかかわる中で、そのときに家畜を持っていた世帯が、それを賄賂として用いて、多くの耕作地を獲得した。

頭数の変動の大きい家畜や、オープン・アクセスの資源である天水畑とは異なり、灌漑畑は半恒久的であり、所有物として移譲することができる。また町に移住している農耕民に、賃貸することもできる。灌漑畑は、現金を生み出す所有物なのである。そのため多くの灌漑畑を手にしたツアマコとそうでないツアマコの間には、明らかな経済的格差が生じている。

これらの灌漑耕作地は、プランテーションと地元の住民との交渉の中で形成されたものである。そしてこのプランテーションは、エチオピア政府が積極的な経済開発に乗り出すなかで拡大していったものだった。プランテーションに隣接する耕作地は、プランテーションの直接の影響のもとでその用水路を利用して形成された。またウォイト川西岸の耕作地は、プランテーションの構築した用水路やウォイト川のダムによる河川管理システムの下で付随的に出現した土地において形成された。その点でこれらの灌漑耕作地の形成プロセスは、外部の社会システムやそれによる地理的な河川システムの変化と、密接にかかわっている。

プランテーションに隣接する耕作地は、行政・プランテーションと地元住民をつなぐ管理システムが構築されており、管理システムだけを見るのならば、現時点では重層的で安定したシステムが出現したと言えるだろう。だが地域のツアマコ社会に目を広げると、世帯間の格差が生じ、社会的なコンフリクトの原因となる可能性もある。共有資源管理のシステムの持続性は、管理システム自体だけでなく、より大きな社会的文脈中で見る必要があるだろう。

ウォイト川西岸においては、行政と耕作者たちの間の関係はより複雑で、流動的なものに思われる。ここでツアマコとコンソというかつては敵対関係にあった民族による共同の資源管理制度がどのように維持されているのか、そしてそれがツアマコおよびコンソの社会にどのような影響をもたらしているのかは興味深い点だが、この点については次の調査の課題としたい。

参考文献

- Berkes, Fikret, 2002, Cross-Scale Institutional Linkages: Perspectives from the Bottom Up. In Committee on the Human Dimensions of Global Change (ed.), *The Drama of the Commons*. Washington DC.: National Academy Press. ベルケス, フィクリット, 2012, 「クロス・スケールな制度的リンケージボトムアップからの展望」 全米研究評議会編, 茂木愛一郎・三俣学・泉留維監訳『コモンズのドラマー持続可能な資源管理論の15年―』知泉書院.
- Feeny, David, Berkes, Fikret, McCay, Bonnie J., Acheson, James M., 1998, The Tragedy of the Commons: Twenty-Two Years Later, *Human Ecology*, 18(1): 1-19. 田村典江訳「コモンズの悲

- 劇—その22年後』『エコソフィア』1: 67-87.
- Hardin, Garrett, 1968, *The Tragedy of the Commons*. *Science*.162 (3859): 1243-1248. ギャレット・ハーディン, 1993, 「共有地の悲劇」シュレーダー＝フレイチェット編, 京都生命倫理研究会訳『環境の倫理下』晃洋書房
- Lavers, Tom, 2012, “Land Grab” as Development Strategy? The Political Economy of Agricultural Investment in Ethiopia. *The Journal of Peasant Studies*, 39(1): 105-132.
- Melesse Getu, 1995 *Tsemako Women's Roles and Status in Agro-Pastoral Production*. Department of Sociology, Anthropology and Social Administration, Addis Ababa University. Addis Ababa: Addis Ababa University.
- Melesse Getu, 1997 Local versus Outsider Forms of Natural Resources Use and Management: The Tsamako Experience in Southwest Ethiopia. In Fukui, K., Kurimoto, E., and Shigeta, M., (eds.) *Ethiopia in Broader Perspective, Volume 2, Papers of the 13th International Conference in Ethiopian Studies*. Kyoto: Nakanishi Printing.
- 宮脇幸生, 2011, 「開発と抵抗—エチオピア西南部におけるプランテーション開発と現地住民の生存戦術—」『人間科学 (大阪府立大学紀要)』6巻: 23-66.
- 宮脇幸生, 2012, 「プランテーション空間と農牧民の生存戦術—エチオピア西南部低地プランテーション周辺に集まる農牧民世帯の分析を通して」『人間科学 (大阪府立大学紀要)』7巻: 133-186.
- Ostrom, Elinor, 1990, *Governing the Commons: The Evolutions for Collective Action*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 佐川徹, 2014, 「エチオピア牧畜民に大規模開発は何をもたらすか」内藤直樹・山北輝裕編『社会的包摂 / 排除の人類学開発・難民・福祉』昭和堂.
- 佐川徹, 2019, 「エチオピアにおける食料安全保障政策と激変する農牧民の生活—大規模開発事業との関係に注目して—」『アフリカ研究』25号: 13-26.

Emergence of New Commons and Formation of Resource Management Systems: A Case of the Tsamako in Southwestern Ethiopia

Yukio Miyawaki

This paper examines how new management systems of irrigation plots have been established among the agro-pastoral Tsamako in southwestern Ethiopia. A cotton plantation had been founded in the territory of the Tsamako in 1990s. The plantation drew water from the Woito River, which flows on the eastern edge of the Tsamako territory. The plantation expanded its field into the pasture where the Tsamako livestock had been fed. Some of the Tsamako resisted the expansion, and raided the plantation, but the riot had been suppressed by the military force of the state. Thereafter the Tsamako have been forced to live with the plantation.

There are two places where irrigated plots have been cultivated. The one is on the place adjacent to the plantation where plots are irrigated with canals of the plantation. Those plots have been given to Tsamako by the plantation and local government to compensate the pasture they had been deprived of. The other is on the western side of the Woito river where water is drawn directly from the river with canals dug by local inhabitants. The place had once been a wet land where the flow of the river had often changed. But after the plantation expanded its field, the flow of the river had been stabilized due to the decrease of water of the river in rainy seasons, and cultivating plots with canals became possible. Those plots are cultivated by the Tsamako and Konso, neighboring people living on the eastern side of the river.

The irrigated plots became important properties which had never been in the Tsamako society before, since they had depended only on rain-fed plots cultivation and livestock herding. Rain-fed plots were open access resources which everyone could use. Livestock were unstable properties which fluctuate according to weather. When it rains enough, livestock increase, but when drought comes, it decrease. The irrigated plots are stable and fertile properties owned privately, inherited to owners' children, and lent to town dwellers with a high rent.

The management systems of the irrigated plots have features which fulfill the conditions of sustainability proposed by Ostrom, such as a multi-layered structure connecting local inhabitants to administration office of the local government, norms to punish free riders and flexibility to adapt to demand of local inhabitants.

Though the management systems seem sustainable, the plots have been distributed inequitably among the local inhabitant. Those who had enough livestock by chance during the distribution of plots could bribe the distributors of the administration office, and could get many plots, while others could get only one plot. Thus the emergence of this new “commons” seems to have brought about inequality among the Tsamako, and may become the cause of social conflict in future.